Opera 贅沢な「音楽劇」となったチューリヒ歌劇場の《マハゴニー市の興亡》

クルト・ワイルの《マハゴニー市の興亡》は、「音楽劇」というアプローチでも改訂されているが、日本では芸能人、欧州でも劇団員やミュージカル俳優などによって上演される事も珍しくないため、今回は、チューリヒ歌劇場の音楽監督が指揮、世界的なオペラ歌手による贅沢な上演を楽しんだ（11月22日初見）。

アッカーマン役のクリストファー・ヴェントリス以外全員が初役ということで、やはり一番安定していたのはヴェントリスであった。貴重なヘルデンテノールの一人として活躍する彼が、このような役も美しく歌い切る底力が素晴らしい。

また、バイエルン州立歌劇場日本公演では、聖女エリーザベトを披露したばかりのアンネッテ・ダッシュが、娼婦ジェニーという対極の役柄に体当たりする様は圧巻だ。終幕のアッカーマンとの二重唱が非常に苦しそうだった以外は、地の彼女に近い当たり役と言えよう。

「体当たり」という点では、ダッシュ以上だったカリタ・マッティラは、立派な声とふてぶてしい演技で、指名手配中のならず者を好演していた。

ファビオ・ルイジが指揮するフィルハーモニア・チューリヒは、ワイルの、暴力的に演奏されるために書かれたような曲にも、可能な場所では美しいハーモニーを響かせ、上演全体の格を上げていた。

客席は普段のオペラの観客と大きく違い、特に平土間席にはスタイリッシュな若者の姿が多く見られた。セバスティアン・バウムガルテンのポップな演出で若い世代のオペラ・ファン開拓が期待できそうだ。　（中 東生）

演出はバウムガルテンのポップなものだった。チューリヒ歌劇場《マハゴニー市の興亡》から ©T+T Fotografie-Tanja Dorendorf